

第 17 回原子力委員会定例会議議事録（案）

- 1．日 時 2003 年 6 月 10 日（火）10：30～11：40
- 2．場 所 中央合同庁舎第 4 号館 7 階 共用 743 会議室
- 3．出席者 藤家委員長、遠藤委員長代理、木元委員、竹内委員、森嶋委員
原子力総合シンポジウム運営委員会 柳沢運営委員長
内閣府 榊原参事官（原子力担当）、犬塚参事官補佐
- 4．議 題
（1）第 41 回原子力総合シンポジウムの開催結果について
（2）原子力委員会の検討課題について
（3）市民参加懇談会コアメンバー会議の結果について
（4）その他
- 5．配布資料
資料 1 第 41 回原子力総合シンポジウム・プログラム
資料 2 当面原子力委員会において検討すべき課題
資料 3 第 11 回市民参加懇談会コアメンバー会議の結果について（座
長報告）
資料 4 第 16 回原子力委員会定例会議議事録（案）
- 6．審議事項
（1）第 41 回原子力総合シンポジウムの開催結果について

標記の件について、柳沢運営委員長より資料 1 に基づき説明があり、以下のとおり質疑応答があった。

（遠藤委員長代理）原子力総合シンポジウムの議題を見ると、基調講演・特別講演以外は技術的なものに偏重している印象を受ける。

（柳沢運営委員長）講演者の方々は予稿集の内容とはかなり違う話をしてい

ただいたので、できるだけシンポジウムに実際来ていただきたいと考えている。中身に関しては、運営側が技術的な学会や協会の会員で構成されているため、技術的なものに偏ってしまったという印象があるかもしれない。ただ、原子力にとっては社会性が重要であることを考慮し、国際基督大学の村上先生等にも講演をしていただいたりしている。

(木元委員) PR もしてシンポジウムの中身も良いのに 100 人しか集まらないのは残念である。外から見てあまり魅力がなかったからなのかもしれない。一般の方をもっとたくさん呼ぶためには、インパクトのある魅力的な題材を取りあげないと、いくら新聞で PR しても人は集まらない。講演者は予稿集と違うことを話すので来てもらった方が良いと言うのなら、簡単なレジュメだけで、予稿集など出さなくても良いのではないかな。いろいろと違う視点で考えた方が良いと思う。

(森島委員) 予稿集の中で、社会的に見て重要なものについては、インターネット等で世の中に発信してはどうか。

(木元委員) 一般の方から、高レベル放射性廃棄物の処分場の選定は公募方式で大丈夫かというご質問があったとのことだが、このようなご質問は大切にしていって良かった方が良く思う。一般の方の関心が高いのは廃棄物ではないかと思う。この質問には誰が答えたのか。

(柳沢運営委員長) 原子力発電環境整備機構の講演者が回答された。

(竹内委員) 原子力総合シンポジウムでは非常に切り口の広い問題を提示しており、良い方向だと思う。これからは新しい芽を伸ばしていただきたい。

(木元委員) 新しいものを取り入れることは他でもやっている。やるならばここだけしかやっていないというものを打ち出した方が良く思う。

(柳沢運営委員長) 昔は、原子力関係のシンポジウムはこれしかなかったもので、このシンポジウムでしか原子力委員会委員長や原子力安全委員会委員長の話を聞けなかった。これからは、より多くの若い人や一般の方に参加していただくためにはどうすれば良いのかなど、参加費など含め、いろいろと検討していきたいと考えている。

(藤家委員長) 今回のシンポジウムで取り上げた 4 つのテーマは非常に良いと思う。社会との接点という点も、これから 21 世紀をどのように考えて

いくのかという点も重要である。ただ、この４つのテーマをまとめてやるとなると、参加者は疲れてしまうと思う。一つずつ聞けるような形であれば良いと思う。テーマ設定には意欲を感じる。講演者の予稿集も皆さんに出してもらった方が良いと思う。

（木元委員）藤家委員長の予稿のように、項目を箇条書きする程度でも良いと思う。

（藤家委員長）予稿集は、聞く側が取捨選択できるように、どのような講演なのかといったことが分かる程度の内容で良いと思う。

（木元委員）おもしろく活気がある方が良い。

（藤家委員長）各委員のコメントは少し辛めだったかもしれないが、来年に生かしていただきたいと思う。

（２）当面原子力委員会において検討すべき課題

標記の件について、榊原参事官より資料２に基づき説明があり、以下のとおり発言があった。

（遠藤委員長代理）資料２のその他に、１２月に開催する予定のＦＮＣＡ（アジア原子力協力フォーラム）について、特記した方が良いと思う。

（木元委員）核燃料サイクル関係について、「核燃料サイクルのあり方を考える検討会」において、立地市町村の首長、事業者、メディアの方々などいろいろな方々からご意見を伺った。これは核燃料サイクルについて原子力長期計画に記載され、そのフォローアップとして、「核燃料サイクルとはこういうものであり、こういうことなので必要だからやりましょう」というように分かりやすく説明するためではない。基本的に原子力長期計画があり、核燃料サイクルは推進するということになっているが、国民の皆さんはどう考えているのか、日本はどう生きるのか、どういう暮らしをするのか、エネルギーの供給のあり方はどうあったら良いのか、という基本的なことを押さえながら、まとめていくことが重要である。「核燃料サイクルのあり方を考える検討会」のとりまとめは、「核燃料サイクルの全体像」になると思うが、これが、核燃料サイクルを単に分かりやすく説明す

るものではないということを確認したい。

それからもう一つ、「核燃料サイクルの全体像」を取りまとめた後は、アクションプランという話になると思うが、この「核燃料サイクルの全体像」を持って地方で原子力委員会を開くという話は、それも一つの案だと思が、もう少し練ってから開催すべきだと思う。

(遠藤委員長代理) アクションプランはこれから練っていくべきという点は同意見である。ただし、現状において原子力委員会が基本とするのは現行の原子力長期計画ではないかと思う。

(木元委員) 資料 2 に記載されている「長期計画の実施状況について」は、今の原子力長期計画に沿って遂行されているかどうかを評価するものである。これも原子力委員会が検討すべき課題の一つであり、遠藤委員長代理から話があった部分ではあると思う。しかし、「核燃料サイクルのあり方を考える検討会」は、もっとマクロなところから討議していると思っている。「核燃料サイクルの全体像を改めて見たところ、原子力長期計画ではこのように記載されているが、皆さんの話を伺ったらこういう観点が出てきた。その中で、原子力委員会は考え、このような全体像を作ってみた。」ということなら理解できる。単に原子力長期計画のフォローアップで、計画はこうなっていて、こうするのだと分かりやすい言葉で説明することとは違うと思う。その点を確認したい。原点に戻ってトレースしようと言っている。

(竹内委員) これからの政策は Plan-Do-See が重要である。どんなものでも計画があり、評価しなければならない。原子力委員会の場合、プランは原子力長期計画であり、これ自身を変えると視点が崩れてしまう。プランが国民全体に理解されていないのであれば、原子力委員会の活動として理解促進に取り組まなければならない。活動の仕方はいろいろとあると思うが、「核燃料サイクルの全体像」を示す方法として、地方で委員会を開催するなど将来的に展開しなければならないと思う。

(木元委員) 国民の皆さんに理解されていないということ、理解されていないから分かりやすいものを作ろうということではなく、理解されていないと思うなら、国民の皆さんがどういうことをお考えになっているのか。あなたを理解したいという立場で始めなければならない。それが「広聴」という、広く伺うということになる。理解させようということが見え見えに

なることは違うと思う。原子力長期計画を変えるという話ではない。

(竹内委員) 「広聴」というのも一つの手法だと思う。原子力長期計画は、1 ～ 2 年かけ、精力的に作り上げたものであり、そこで出来上がったものは国の施策だと思う。国の施策というものの自身は重要なものであり、そう簡単に変えるものではないと思う。国民の皆さんに理解されていないということが問題である。

(木元委員) なぜ理解されていないのかということを探らないといけない。理解されていないから分かりやすく説明すれば理解されるのではないかと考えることは安易であると思う。もう少し心を広く持って、原子力をどう進めるのか考えていくことが必要だと思う。

(森嶋委員) 竹内委員の話と木元委員の話は、言い方の違いだけで、話の中身自体はあまり違いがないと思う。国民の皆さんに理解されているのかいないのかということは抜きにして、現実にはいろいろな問題が提起されている。しかし、原子力長期計画の策定時には、そういうことを議論したはずであり、原子力長期計画に記載されている話である。しかし、原子力長期計画に記載されていることに対し、いろいろな問題が提起されているときに、原子力長期計画でこう決まっているのだから、それを分かりやすく説明するというよりも、今の段階では、いろいろと提起されている問題に目線を合わせ、そして答えながら、原子力長期計画がどういう戦略を持っているのかということの説明することが重要だと思う。理解していないから易しく言えば理解してくれるだろうとは思っていない。理解されていないとすれば、問題点が出てきているもの、提起されたものについて、一つ一つ答えるという作業をしなければ先に進まないだろうと思う。そして、説明の仕方は、単に難しかったものを易しく説明するというのではなく、提起された問題に答えながら説明していくことが必要ではないかと思う。

(木元委員) 「核燃料サイクルのあり方を考える検討会」において提起された問題はたくさんあると思う。それを原子力委員会が真摯に受け止め、こういうことだったのかということで、その方々を理解した上で、言葉というものは出てくると思う。また、原子力長期計画について、あれだけエネルギーを使って策定したのだから完璧なものだということにはならない。いろいろなアクシデントが起き、世界も変わっている。その中で様々な批判が出てきていることを受け止めなければならない。原子力委員会はもう一度原点に戻って、トレースし、そして、次の長期計画策定時に展開して

いくということではないかと思う。

(藤家委員長) 各委員の意見は、あまり違っていないと思う。原子力委員会は、原子力基本法の下、政策に対して責任を持っている。それでは、政策に対して責任を持つということはそもそもどういうことなのか。現行の原子力長期計画は、原子力委員会からこういうことを議論してくださいと原子力長期計画策定会議にお願いし策定したものである。これに対して、原子力委員会はある段階までは遵守義務がある。それが世の中に理解されていないとすれば、どういう形にしる、理解されるように努力しなければならない。同時に、時代は常に変わる。したがって、現実方策は度々変えてきている。そして恐らく今後も変えなければならない。その変え方を探る上で何が役に立つかというと、原子力委員会が実施している専門部会、市民参加懇談会、そしてこの定例会議であると思う。しかし、原子力長期計画を変えることは簡単な話ではなく、変えるための準備作業を、今の原子力委員会は始めなければならない。原子力委員会のミッションははっきりとしているので、そこに向けて協力してやっていきたいと思っている。

(木元委員) 藤家委員長から話があったとおり、責任があるからやるのである。この前の「核燃料サイクルのあり方を考える検討会」において、山地氏から原子力委員会は「裸の王様」であるという話があった。ある意味で、「裸の王様」であるということを経験した上で、改めて責任をとる。そして時代の流れと乖離しているのなら、その乖離をどうやって埋めるか考えるなければならない。

(藤家委員長) 世の中の多くの人が「裸の王様」と見ているということではなく、ある一人の方がそういう見方をしているということだと思う。原子力委員会はこの2年半、本当に「裸の王様」みたいなことをやってきたのか。各委員の協力により、いろんな面を出してきたはずである。自分達がやってきたことに責任を持つと同時に、誇りを持たなければならない。木元委員がいつも言われるように、原子力委員会は見える委員会、逃げない委員会を目指してきたはずである。従来の原子力委員会と比べ、それなりに進歩したと思う。

(木元委員) 進歩しているとは思う。これだけ努力してきたのだから。しかし、見えるようになってきたのだろうか。支持率をとっていたら回復してきたことが分かったかもしれない。これからも広い心と視野で、世間からどう見られているかということを真摯に、自ら客観視していくべきだと思う。

う。

(森嶋委員) 先ほど話をした「各委員の意見は最終的には違わないのではないか」といったのは、原子力委員会として何をやるべきかということについてである。何をやるべきかというときに、アプローチとしてはいろいろな考え方があっても仕方がないが、少なくとも原子力長期計画を作った後にいろいろな問題が出てきたことに対して、次の原子力長期計画の策定時にどうするかということは別にして、今の原子力長期計画の下で原子力委員会が役割を果たして行くとしたら、一つ一つの疑問に答えていくことが重要であり、その点については各委員とも考えはあまり変わらないと思う。国民の皆さんが理解していない、あるいは、「裸の王様」であるとか、表現の違いはあるが、基本的に原子力委員会の中での方向性は変わっていないのであって、アプローチの仕方が違うことは、やむを得ないと思う。

(藤家委員長) 議論することは良いことだが、お互いにコンセンサスに向けて努力することも重要だと思う。

資料2の原子力二法人統合について、これは閣議了解が出たその日に臨時会議を開いて対応を決めた、文部科学省の会議にも2回ほど出席し、原子力委員会の考え方を説明した。この課題が持っている重要性というのは、日本のこれからの原子力研究分野の8割を担うことになり、統合法人がうまく機能してくれることが重要である。

また、核燃料サイクルについて、地方委員会のようなものを開催することとは、一つの説明責任を果たすことになると思う。皆さんのご意見を伺うことも重要だが、これまで伺った意見をどう集約し、次につなげるかという努力を、原子力発電・サイクル専門部会などにおいて、地道に議論していくことも重要だと思う。

(木元委員) 地方委員会というのは各委員のイメージがそれぞれ違うと思う。それをすり合わせなければならない。言葉だけが独り歩きしており、良くないと思う。違った言葉のほうが良いと思う。また、「核燃料サイクルの全体像」について、6月に取りまとめる予定なのか。それはわれわれの討議が終わった後でまとまるということか。

(藤家委員長) 地方に行くときに何も資料なしでというわけにはいかないと考えるので、まとまり次第ということになると思う。現在のいろんな状況を見ると、早い対応が求められていると思っている。

(3) 市民参加懇談会コアメンバー会議の結果について

6月9日(月)に開催された市民参加懇談会コアメンバー会議の結果について、犬塚参事官補佐より資料3に基づき説明があり、以下のとおり意見交換があった。

(木元委員)これまでの市民参加懇談会は、開催地域に応じてやり方を考えてきた。次の開催地である敦賀は、長く原子力と共生している地域である。どのような理由で、どのような状況の下で原子力が導入されて、現在に至っているのかについて説明し、長く原子力と共生している地域の方々はどう受けとめているのか、未来にどのようなビジョンを持っているのかについて伺いたいと考えている。会場は、いつものように壇上を設けずにフラットなところにいすを並べ、客席は第一回に近い形で半円形に囲むようにしたい。関係者の席は会場に配置し、質問に答えてもらう場合はマイクのところまで出てきていただくようにして、いろいろな意見を近い場所で交換できるようにしたい。

次々回の開催については、東電の電力不足問題の結果が見えてくるのが9月中旬のため、9月下旬から10月上旬に開催する予定である。テーマとしては、我々がライフラインとしている電気とは何かという点や、需要と供給という点を取り上げてはどうかとの意見があり、今後検討していくこととしている。また、昨日のコアメンバー会議では、広島での開催を希望する声もあった。原爆の被災地で開催することにも意義があるのではないかと。原子力委員会は平和利用の番人であるので、それを原点に討議することもあり得るのではないかと。広島で開催する場合は、このようなテーマになると考えている。

(藤家委員長)先週の定例会議で、コアメンバーの方々からこれまでの活動について報告していただいたが、皆さんのご感想はいかがだったか。

(木元委員)コアメンバーの方々からは、我々が一生懸命やっていることを受け止めていただき良かったとの話があった。私からはコアメンバーの方々に、藤家委員長からも大変良かったとの話が良かったことをお伝えした。また定例会議で報告させていただきたいと考えている。

(藤家委員長)議題(2)でも取り上げられたことだが、核燃料サイクルについて政治的にも議論がなされている。去年スタートした核燃料サイクルのあり方を考える検討会を進め、早い段階で全体像をとりまとめ、ご意見

を伺えるような形にした方が良くと思う。具体的なことについては追って相談したい。

(4) その他

- ・事務局作成の資料４の第１６回原子力委員会定例会議議事録（案）が了承された。
- ・事務局より、６月１２日（木）に「核燃料サイクルに関するあり方を考える検討会（第９回）」が開催される旨、発言があった。
- ・事務局より、６月１７日（火）に次回定例会議が開催される旨、発言があった。